

放送作家情報



2005/6/15

Vol.22

発行/社団法人 日本放送作家協会

編集/広報委員会 〒 106-0032 東京都港区六本木 6-2-5 ハラビル

☎ 03-3401-5996 FAX 03-3408-7411 E-mail to: info@hosakkyo.jp

日本放送作家協会会員の皆様に、協会の活動報告をお届けします。2005年に入ってから、様々な動きがありました。これらについては既に放作協のホームページに掲載されていますが、当情報誌はそのダイジェスト版として編集いたしました。まずは、市川森一理事長からのメッセージです。

あなたの支えになれますように！

社団法人 日本放送作家協会 理事長 市川森一

放送作家とか脚本家とかよばれている私たちには、ライセンスというものがありません。名刺を作っても名前と自宅住所だけの心細いものです。そういうわけですから、「日本放送作家協会」の会員であるということは、社会にライターという身分を認めてもらうためのライセンス代わりなのだ、と私は長年思ってきました。年間納める会費も、己が生業を周囲に認知してもらうための保証費のようなものだと言い聞かせて払い続けてきました。

私にとって放作協は、寄る辺ない身の唯一の心の拠り所でありました。だからこそ、放作協には、頼り甲斐のある、強くて、誇らしい組織でいてもらいたいと願ってもきました。後年、理事の一員になっても、会員であることを誇りに思える協会にしたいという一念で関わってきたつもりです。

「脚本アーカイブス」の設立運動も、NHKに対する「放送作家等審査委員会」の名称変更の要請も、「韓国放送作家協会」への交流の呼びかけも、(私個人の)行動の根底には、放作協の存在感を世間にアピールしたい意図が働いていたことは事実ですし、会員のみなさまに、「オラが協会は、やってるじゃん」とか誉めていただきたい気持ちも正直ありました。

テレビ文化が始まって五十年、その間に放送されたドラマ、構成番組等の放送台本は膨大過ぎる数でしょうが、未だにそれを保存、管理するシステムは、わが国には存在しません。また、その必要性を訴える組織もありませんでした。テレビ台本を未来のために保存しておこうなどという発想は、放送作家の他には持つものがないのだと悟ったときに、「脚本アーカイブス」の設立は放作協でなければできない事業であると思ったのです。この計画は私が国会の総務委員会で訴えてから二年を経たいま、ようやく文化庁や足立区行政の支援を得て、第一段階である脚本、放送台本の収集作業にかかれるところまではこぎ着きました。

NHK内部の一連の不祥事からその再発防止のために設置された「放送作家等審査委員会」なるチェック機関に対しては、公表された直後から放作協内部でも激しい反発の声が巻き起こり、先ずは、あたかも放送作家が犯罪を犯したかのごとき誤解を世間に与えるその名称の変更は、協会の名誉と信用のためにも抗議すべきだという理事会の決議をうけて、NHK側に会談を申し入れ、その件に関する協議を重ねてきました。結果、最終的には、放送総局長代行の出田理事より協会(理事長)宛に、問題の名称の廃止と、委員会のさらなる適正化をめざす旨のご説明に加えて、この件で、放送作家としての名誉や信用を損ねた事に対するお詫びが明記された親書が届けられました。私はこれを理事会で報告し、理事諸氏の同意を得たのち、NHKの新たな執行部の誠意ある対応に感謝の意を表して、この件に関する一応の収束を表明し

ました。

この一件を通して、あらためて、放作協があってよかったと思ったのは私ひとりではなかった筈です。「政治間が不安定な時ほど、文化力を発揮するチャンスにすべきですよ」と私に提言してくれたのは、日本経済新聞社長の杉田亮毅氏ですが、日韓の間で竹島問題が起こった時に、その直前に実現した「日韓放送作家懇話会」の意義をあらためて痛感しました。

企画事業委員会の提唱で、協会の会員たちが韓国を訪ねてあちらの放送作家たちと懇親会をもつというツアーでしたが、これは大成功でした。なによりも、韓国放送作家協会の真心からのもてなしに感動させられました。豪華な宴席にも目を見張りましたが、そこで懇談も楽しく、かつ内容のあるものになりました。私などは、隣席に「冬のソナタ」の二人の女性脚本家を見つけて、3ショットの写真を撮ってもらうなどのミーハーをしてしまいました。こうした私たちの訪問は、韓国の各新聞にいずれも写真入りで大きく取り上げられました。その後、韓国放送作家協会は中国の北京や上海の各放送作家協会とも交流会を催して、アジアの放送作家集団を中心にしたテレビ文化のネットワーク作りに取り組んでいます。

日中韓の政治情勢が不安定な折に、韓国の放送作家たちのこうした国境を超えた積極的な文化活動は、ますます有意義なものになっていくでしょう。世話役のひとりだった南愛梨理事が別れ際、目を輝かせながら私に言った、「次には、日中韓合同の放送作家シンポジウムを済州島でやりましょう」の一言が、いまでも重く私の上にのしかかっています。それは、はたしていまの日本の放作協に韓国や中国と対等にお付き合いができるだけの力があるだろうかという不安です。不安の中にもそれは、ひとつの明確な目標ともなりました。

「脚本アーカイブス」設立事業。「放送作家等審査委員会」名称廃止運動。日韓放送作家交流促進。これらは、このところの放作協活動の代表的なもので、今後も継続していく活動であり、放作協の方向性を決める指標ともなるものです。このあたりで一度、会員のみなさまにそれぞれの経過をご報告しておこうということで、三点セットの報告特集となりました。

繰り返しますが、これらのことはすべて私たちが所属する放作協への信頼と存在感を高めるためのものです。会員であること、放送作家であることが誇らしく思えるような、なんとなくでも支えになれるような、一体感のある放作協をめざします。ご報告します活動について、会員のみなさま方のご賛同とご参加を切望するものです。

2005年3月4日より7日にかけて、日本放送作家協会では日韓放送作家交流ツアーを実施しました。市川森一理事長はじめ協会員を中心に20数名の参加者があり、韓国放送作家協会を訪問し「放送作家教室」などの施設を見学させていただくと共に韓国放送作家協会の関係者と親交を深めました。『冬のソナタ』など韓国ドラマの第一線で活躍している放送作家と、日韓の放送界の現状について率直な意見交換をしました。お互い新しい発見もあり、相互理解を深めることができ、大変意義のあるツアーであったと思います。そこで、交流ツアー実現のコーディネーター役となった津川泉理事にツアーを総括してもらいました。

シ ジ ャ ギ パ ニ ダ

日本放送作家協会理事 津川泉

「シジャギパニダ」

金浦空港の解散式で申し上げた言葉をもう一度ここに引用します。

「シジャギパニダ＝始まりが半分だ。物事は始めさえすれば半分は成就したも同じだ」。あるいは「案ずるより産むが易し」とでもいいでしょうか。もっといえば「見る前に跳べ」といっても良いかも知れません。韓国の優れたことわざのひとつです。韓国語の「シジャク」は漢字で「始作」です。「パン」は「半」です。こうして漢字にしてみると分かりやすいでしょう？

「始作」は「初期」というより「アクションを起こす」といったニュアンスが強いように思えます。その

意味で、まさに今回の旅行は「アクションを起こす」旅だったと言えましょう。

この訪問旅行のそもそもの言い出しっぺは南川常務でした。私がたまたま二年ほどの留学経験があったため、段取りと下打ち合わせの担当をおおせつかったのです。

十一月と二月の二回の訪韓を経て、次第に日韓放送作家交流旅行の形が整ってきたのですが、当初はあくまでも有志による非公式な訪問の予定でした。それがやがて、韓国放送作家協会と KBS 宛ての公式文書が交わされ、あれよあれよという間に準公式的な行事へと変容していったのです。ついには訪韓する我々放送作家の詳しいプロフィールを韓国マスコミ各紙に配信するための韓国語版プレスシートまで作ることになり、大いに慌てることとなりました。

結局、そうした情報が韓国聯合通信に配信され、朝鮮日報、ハンギョレ新聞に我々の訪韓の記事が載り、国民日報と韓国日報の記者が取材に訪れ、計四紙に掲載される結果となりました。

受け入れ側の南常任理事はこれまでもお会いした「ケンチャナ（大丈夫）精神」「ペチャン（度胸）文化」を体現した男性韓国人と違い、女性らしい繊細できめ細かな饗応振りで、交流旅行を望外の成功に導いていただきました。もちろん、水面下では書類の不備、その他さまざまな齟齬が生じて、あれこれやりあいもしましたけれども、これも交流にはつき物の良き思い出といえましょう。

韓国放送作家協会では顧問で長老格の韓雲史先生が出迎えてくれました。私にとっては十一年ぶりの再会です。歓迎宴での機知に富んだ流暢な日本語のスピーチ、とりわけ「夢の木」の比喩の話など、会員一同に強い印象を残しました。

帰国後、韓国版『人間の条件』と称される彼のベストセラー『玄海灘は知っている——阿魯雲伝』正統二巻の見返しに彼の手になるつぎのような言葉を見出しました。

「人間の側に立ちましょう」「人間のために書きましょう」。九四年の訪日の際、サインしていただいたものです。改めて先生らしいこの言葉をかみ締めると同時に、先生のご健康と韓国放送作家協会のご発展をお祈りして筆を擱きます。

ホームページ上でも、「日韓放送作家交流ツアー」に参加された会員の手記を一部掲載しています。20数名の参加者全員の手記を寄稿順に掲載する予定です。ここでは、すでにホームページに掲載されている手記をご紹介します。（順序はホームページへの寄稿順です）

富川元文（協会員）

イムジン川、仁仙洞、KBS、韓国放送協会との交流会、いろいろありましたが、その中で印象に残ったのが韓国協会の元理事長・ハン先生の二つの言葉でした。

一つ目は「ユンナム（夢の木）」という言葉です。

「日本のテレビは視聴率等々の問題で非常に好ましくない状態……、韓国の放送に関しては？」という市川理事長の質問に答えたのが、この「ユンナム」という言葉でした。親が出来なかった事を子供に託す、親の思いを子供がかなえてあげる、それがユンナム（夢の木）で、韓国にはその夢の木があるから大丈夫だと自信を持っておっしゃったのです。

二つ目は「昨日の恨み」という言葉でした。

ハン先生はその年齢から察すると朝鮮半島が日本の統治下だった時代に日本語教育を受けたのででしょう。流暢な日本語で韓日関係を語るときにポロリと漏らしたのが「昨日の恨み」と言う言葉でした。恐らく何気なく使った言葉でしょうが、その中にハン先生の心情を覗いたような気がしました。日韓の問題を少しは理解していると思っていた私はこの言葉に改めて日韓の溝を感じました。私には昨日の恨みという感覚ではなかったのです。昨日ではなくて先月であり、去年であり、遠い過去の恨みという感覚だったのです。ふと思いました。恐らく日本の若者は、ハン先生の恨みは歴史の教科書の内容であり、感情の伴わない、活字の恨みでしかないのでしょうか。まだまだ日本と韓国との溝は大きく深いのだと実感しました。

この溝はソウル市内を一人歩きしたときにも感じました。私は海外に旅行したときは必ずその土地で理髪店に行くことにしていますが、南大門の小さな理髪店で思ったことは、イルボンサラム（日本人）は

好かれていないということでした。何故そう感じたのか、説明は難しいですが、インド、トルコ、ネパール、ニューヨーク他の理髪店との比較からそう思ったのです。

しかし、行ってよかったと思う旅でした。向こうの作家と飲んで食べて、近くて遠い国が少し近くなりました。そしてもう一つ、われわれ日本の協会員との親交、お名前は知っていても話すことはなかった方々と知り合えたことは大きな収穫でした。

高桐唯詩（協会員・理事）

毎年のように欧州へ出かけ、西洋人のふりをしていても、自分は、やはりアジア人ですね。韓国の蕁葺きの家で車座になってご飯を食べれば、もう寝転がってもいい気楽さ。まるで兄弟か親族の家にいるようです。これこそが、日本と韓国の間柄であり、同じタオルで汗を拭く、肉親的關係に似ています。

僕は、自分が 100%大和民族だとは思いません。血のどこかには、繋がるものがあるはずですが、すべて同じかというそうではない。お互いは、違うのです。その違いを認識して、尊重しあうことで、新たな未来が作られていくのでしょうか。

津川大兄のお導きで、憧れの韓服を買い、最終日にはそれを着て、街を歩きました。朝焼けの古びた線路、適当にコンクリを打った階段。ソウルの裏町のノスタルジー、エレジーを味わいました。若者は未成熟ですが、日本のニートのようにぼうふらではなく、生き生きしていました。

韓服は、着物同様背筋を伸ばして着ます。ま、それは万国共通であって、アラブの首長もイギリス人も、偉い人は背筋が伸びていますものね。

また、マッコリを呑みに、こっそりと韓国に行きたいと思っています。

杉原秀一（協会員）

日本テレビの火曜夜に放送されている「少年チャンプル」で、私は、衝撃のダンスユニットを見た。彼らの踊りは、人間技を超えており、スピード感、シャープなコリオに世界の頂点を見た思いであった。柔軟性を駆使した踊り、筋力の極限に挑むトーマス、スピンヘッドの連続技の新しさは、ブレイキン・ダンス文化を創造した。20世紀ミレニアム、日本勢は、初めて韓国チームに敗退し、21世紀に入るや、韓国チームは、ブレイキン部門で世界の頂点に立った。

私は、韓国の若者たちが外国文化を吸収し続けるエネルギーの源流を今回の韓国ツアーで発見できたように思う。韓国作家協会との交流では、協会に設けられたシナリオ講座の教室に、書くことが楽しいと言わんばかりに、目を輝かせ、畏れるものは何もない若者の「若さ」の特権が充満していた。

また、その夜のミュージカル『地下鉄1号線』は、先ず、歌唱力に圧倒させられ、次いで、見させる構成、エスプリの効いた台詞にすっかり感じ入ってしまった。だが、踊りは、やや、疑問であった。

男性3人のナンセンス系の踊りは、昨年12月にロンドンで見たロイヤルバレエ公演『シンデレラ』での姉妹の踊りにも似て、これは評価できた。特に、やや、ぶれは感じたものの6回のピルエットは、バレエの素養を感じさせた。また、階段のあの高さからの両足開脚でのジャンプは、筋力と柔軟性を必要とするバレエエクササイズを受けていることを推察させた。しかし、問題は、コリオグラフィである。特に、群舞のフォーメーション活用がなされていない。何故、そうなのかであるが、今、韓国は、洪水のように入ってくる欧米文化を「砂漠に水」のように吸収しているのではないかと思った。しかし、それは、柔軟な筋力と脳細胞を持つ若者だけが吸収し得ているのであって、たとえば、ストリートダンスでは、ブレイキンは世界一であるが、ヒップホップやポップはやってないに等しいし、ミュージカル構成でも、表面は群を抜く力量でも、裏の部分、たとえば主構成の支援部分、バックダンスコリオにまで気が行っていない。このミュージカルが見せているだけに惜しい。

しかし、こうしたエネルギーな若者にも悩みがあるらしく、若者の親達はストリートダンスをやる若者は不良だと白眼視するらしい。文化ってのは、こうして叩かれ、批判され、居場所を失わせ、それに耐えることで雑草のような逞しさから根を張るものである。韓国の本当の凄さはこれからであろうし、実際のところ、数年後が楽しみではある。

西谷清治(協会員・理事)

「実は・・・、私は冬のソナタにはまった一人デス」

改めて「実は・・・」なんてコソコソと言わなくても良いことなんだけれど、ヨン様にはまった正統な日本のおば様たちと違って、50代のおじ様は、胸を張って「私は冬ソナにはまりました」なんてとても大きな声では言えない。そんなこと言おうものなら、「エッツ、ナンで？」と驚きの声とともに、肩身の狭い思いをすることになる。

あえてコソつとはまった理由を言わして頂くなら、「冬ソナ」には、私たち団塊の世代が送った、青春時代の恋の様式があった。好きになってもなかなか手を握れない、キスなんかとんでもない、そして万が一、万が一にデスヨ、一緒に部屋で過ごすナンテいうことになっても・・・。ドラマの中で繰り広げられる、ヨン様とチェ・ジウ嬢のなんとも悠長な恋の行くへ。そこには、私たちが忘れかけていた「胸キュンでスローな歩み」があった。

さて、前置きが長くなったが、今回の日本放送作家協会の親善訪問で、心密かに念じていたのが、「冬のソナタ」の作家たちとの懇談。日本の迎賓館とはいかなくても、目黒雅叙苑か白金八芳苑のようなコリアハウス。そこでの歓迎の宴の際、念願が叶って、その二人の作家たちに会うことができた。

日本で韓流ブームの火付け役となった「冬ソナ」。渋谷の某テレビ局の関連会社では、DVDなどの関連商品を含めて相当な高額を稼いだそうである。こんなに稼いだ作品の作家たちだ。きっと、シャネルやグッチのブランドに身を固め、香水プンプン、剥がれ落ちるような厚化粧のおば様かと思ったら、これがナント見た目20代後半の質素な女性たち。会場にお越しの際も、BMやベンツで現れた風もなく、地下鉄やバスを乗り継いできた感じである。

その控えめな姿を見て、「いくらかせいだの？」なんていう品のない質問は、発せられなかった。

「日本でこんなにもブームになった理由は？」

「私たちも分からないんです」。

一生懸命書いてきた結果が、数年後に突然大ヒット。「何故？」と面食らっているというのが、本当のところらしい。

今回は、日韓の放送作家たちが、交流を持てた良き機会だった。多くの作家たちと触れ合うことができた。そして韓国流の仕事の進め方も分かった。これからも多くの作家たちが、往き来できるようになればよいと思う。

「俺サ、今度のドラマのヒットで幾ら儲かっちゃったよ」「今度日韓共同制作の作品があるんだけど、どんな所が押さえどころ？」なんていうやりとりが、作家同士でできる日を期待したい。

藤森たかし(協会員・理事)

私、実は島根県の出身です。(地元の)「竹島」問題に関しては松葉ガニ問題など言いたいことが山ほどあります。でも、それはこの稿のテーマではないのでやめておきます。

そんな私が、韓国に行って参りました。初めての訪問です。すみません。実は2、向こうの放送作家協会との交流よりも、恐いモノ見たさが目的だったのかも。もしかして、入国審査で「島根の関係者は入国させません」なんて言われるんじゃないかと、実は3、真剣に思いました。パスポートには「シマネ」の文字が入っています。でも、案に反して審査は簡単にパス。

育った家のお隣さんが在日(1世)の方だったせいもあり、私には、韓国に対していろいろな事前知識がありました。先入観といってもいいかもしれません。曰く「徹底的に男性社会」であること。それに対して? 「女性がキレイ」であること。日本の女性のみなさんスミマセン。そして、くだんの件のこともあり「日本人がキライ」であること。

実は4。今回の旅行はそうした事前知識がことごとく裏切られる旅だったような気がします。女性の姿はあらゆる場所で見られ、みんなそれなりに輝いているように見受けられました。確かにキレイな人もいるけど、なんだ、こりゃ日本と同じじゃないか、と。もっとも、「夜の街」には今回は行っていません。

確かに「反日」の臭いは多分にしましたが、いち旅行者には、とても親切な印象が残りました。ソウル駅で新幹線が見たいという、駅員さんたちは笑顔で改札を入れてくれたし、夜訪れたバー（日本の居酒屋程度）の若いスタッフは、ハングルのメニューと閉店時間をカタコトの英語で一生懸命教えてくれました。韓国人ガイドさんによると、「日本人」はしゃべらないでも、一目でそれとわかるといいます。それでも、嫌な思いは一度もしませんでした。

もちろん、3泊4日ですから。単なる印象です。それでもよかったです。やはり、事前知識なる先入観は、現地取材でぶち壊すに限る、と改めて思ったのがそれなりの成果です。

皿倉のぼる（協会員）

『冬ソナ』の作者二人に共作の秘密を伺ったものの、ハングルも英語も出来ないの、つっこんだ会話にならず残念だったこと。けれど、ラジオの時事番組の作家さんと英語と漢字混じりの筆談で盛り上がったこと。韓国の作家さんとの交流は貴重でたのしい時間でした。

なかでも、訪韓ツアーの収穫は、日本国内の作家さんとお会いできたことです。30人近い中に知り合いは2、3人、しかも関西からただ一人の参加者ということで、ひそかに緊張&心細く思っていました。が、いざ参加してみると、そこは同業のよしみというのか、法事で親戚のお兄さん・お姉さんに会うような感じでした。お世辞でなく、みなさん細やかでサービス精神旺盛。業界9年生としては、かくありたいと思う先輩たちばかりでした。

また、さすがは作家集団、と感心することも多かったです。たとえばスタジオやドラマのオープンセットで、互いにスナップ写真を撮り合うのにも、誰からともなく演技指導が入ること。ミュージカルをみた後、ほぼ全員から「わたしならこう書く」とダメだしが出る場所。

そして、東京のベテラン勢も私と同様に、KBS内の放送作家室が羨ましいと思っていると知って、ぐんと親しみがわきました。韓国のことを遠いようで近い、近いようで遠い国といいますが、地方の作家が東京や東京の作家さんへ抱く気持ちに似ているかもしれません。地方も東京も、本質的なことは変わらないし、エリアや専門のジャンルは違っていても、同じ放送業界で生きていく者の悩みは変わりません。

入会して6年、京都在住ですが、エリアをこえて各地の方に相談にのっていただいたり、情報交換をしたりと、お世話になっています。放作協は、会員同士が支えあえるゆるやかなつながりだなあと実感しています。

東京は日本の放送作家の矛盾が集中しているところで、その分よい教訓や有益な情報もあるはず。エリアをこえて個々の交流を盛んにすることが、それぞれの地方やそれぞれの仕事を豊かに耕すことにもなるのではと思います。韓国も近いけれど、東京はもっと近い！訪韓ツアーに限らず、たのしい交流の機会をつくっていただければありがたいです。

さらだたまこ（協会員・理事）

食事をするとき、「お茶碗は手に持ちなさい」と躡られた日本人。だが、韓式のマナーでは器は持ち上げてはいけないと聞いていた。今回の日韓放送作家交流では、初日の夜に韓国の方々に美味しい宴でもてなされたが、そのとき隣に座っていた日本語が堪能な韓国の女性と、器を持ち上げるマナーについて話が及んだ。彼女は日本に留学しているとき、器を持ち上げる日本の習慣に最初とまどいを覚えたという。

実は中国料理にしても、西洋料理にしても、原則として器は持ち上げない。日本の習慣が逆に特殊なのである。何故かという、日本の料理はそもそも銘々膳で食べ、食卓というものがなかった。韓国でも一般的な卓袱台が日本の家庭に普及したのは大正期だという。日本では長らく畳に置いた低いお膳から食べるから、器を持つ必要が生じたのだろう。

「中国や韓国から色々な文化が日本に伝わったけど、何故食卓は伝わらなかったんでしょうね？」とくだんの女性に聞くと、彼女はちょっとためらいながらも「実はこんなジョークがあるんです」と言って、教えてくれた。「中国から文化が伝わる時、韓国には陸づたいに、そして日本には海を渡って。日本に伝わらなかったものは、船が嵐に遭ったとき、玄界灘に捨てた」と。彼女は、それを聞いて私が気分を害

さなかつたか心配してくれたが、私はむしろ目からウロコが落ちた気分だった。

「玄界灘に捨てられた物」は何だったのか？ そんなことは今まで何も考えずに生きてきた。今の時代は、海に捨てることなく、双方向に情報が伝わる時代になったし、見聞ではなく、誰もが直に足を運んでお互いの文化に触れられる時代になった。だからますます、私達は「玄界灘に捨てられた物は何だったか？」などということに、考えも及ばなくなるだろうし、関心を持つこともないだろう。

今回の韓国訪問では、私達は温かいもてなしを受けた。フリータイムに出歩いた時も、市井の人々は、皆、私達に親切だった。私達は、今回の訪韓をきっかけに、日韓の文化の架け橋になりたいと、夢を描いた。隣にあって、似ているようでありながら、いろいろな違いがある国同士。互いを理解するときに、上辺だけ整った橋を架けるのではなく、ここでもう一度「玄界灘に捨てた物」を見つけて、海に沈んでいた長い時間を思い起こす必要もあると思った次第だ。

続いて、韓国放送作家協会の南愛梨常任理事より、今年3月末に当協会に寄稿いただいたメッセージをお届けします。この原稿は、韓国の通訳、南ミンジョン氏に翻訳していただいたものです。

日本放送作家の皆様との出会い

韓国放送作家協会 常任理事 南 愛梨

去る3月初め、お忙しい中をお時間を割いてくださり、韓国を訪れてくださった日本放送作家の皆様、その後いかがお過ごしでしょうか。韓国放送作家協会の常任理事を務めている南愛梨です。

今日は、久しぶりののどかな春日和です。もうすぐ、汝矣島にある協会の前の道から国会議事堂周辺まで、桜が一斉に咲くことでしょう。もの寂しい枝から芽を吹き出そうとしている花のつぼみを見ながら、日本放送作家の皆様と韓国放送作家との出会いも、このように'新しい花のつぼみ'を開かせる準備をする段階に来ているという気がしました。

韓国放送作家協会は、1957年放送作家の親睦団体として出発し、1970年放送作家協会に改称、1977年社団法人韓国放送作家協会として、再び生まれ変わり現在に至っております。

このような変化の中で私たちの先輩は、先立って設立された日本放送作家協会の方々にあらゆる点で諮問を受け、大変お世話になったことを忘れてはおりません。

今回、皆様韓国にお越しの際に、お世話になったことのほんのわずかですが、恩返しのできたのではないかと喜んでおります。

協会の状況を申し上げますと、韓国放送作家協会の会員は、現在約1700名（2005年3月末現在、1673名）に迫る勢いで、ドラマ・ドキュメンタリー・コメディ・バラエティ・ラジオ番組、そして外国映画の翻訳作家などが会員に含まれております。

日本放送作家協会と大きく違う点は、'脚本家連盟'が別途になく、協会の中に'著作権部'を置いて著作権料協議をしながら会員の権益や親睦を図り、そして収益事業である'ドラマ作家教育院'運営までがすべて協会の業務です。

私が協会の仕事を任されたのは、2004年2月23日からで、ようやく一年が過ぎました。最初に放送作家協会の仕事に足を踏み入れた時から、日本放送作家協会の皆様にお世話になったお返しをしようと努力してきましたが、今回のように多くの作家の方々の出会いが、こんなに早く実現するとは予想だにしておりませんでした。

市川森一理事長さんや韓国通でいらっしゃる津川さん、そして南川さんの推進力に対して改めて敬意を表します。

韓国放送作家協会は、現在韓流ブームが東南アジアやメキシコ、ハワイ、ニュージーランド、アフリカにまで、世界の各地に広がっていることに非常に高ぶりを覚えております。ドラマの最も基礎的なコンテンツを提供する主役が、他ならぬ韓国放送作家協会の会員だからです。

今回の訪韓でも、お会いになられたでしょうが、現在育っている若い作家たちの力がどこまで伸びるか私たちも予測できない状態だというのが本当のところでは。

ただ、先輩放送作家が後輩放送作家に口を酸っぱくして言っていることは、'生きている人間のドラマ、大変な暮らしの中で少しでも癒すことができるドラマ'を書いてくれということです。

将来、日本放送作家の皆様が韓国を再び訪問される時には、さらに素晴らしい作品を書く会員が増え、協会も一層成熟した姿で皆様にお目にかかれることを期待致しております。

今回の韓国訪問が短い日程のわずかな出会いであったことが残念でなりませんでした。限られた紙面に思いの丈を書き綴ることができないのも、やはり残念でなりません。お体にお気をつけくださり、今後'いい出会い'の花を一緒に咲かせて行くことを願っております。

NHKの一連の不祥事の結果、改革案の一つの目玉としてNHKは「放送作家等審査委員会」なるものを設置するという報道が新聞紙面などを賑わしました。しかし、この報道によって、あたかも放送作家が不祥事に加担したような誤解を世間に与えてしまったのではないかと、我々は危惧を抱きました。そこで、放送作家協会はNHKとこの名称の撤回や内容面の是正を求めて真剣に話し合う行動を起こしました。

NHK「放送作家等審査委員会」についての当協会の対応

一 厳重抗議と、名称撤廃までの経緯一

日本放送作家協会理事 安達 充 (放送を考える委員会 委員長)

日本放送作家協会理事 香取俊介 (広報委員会 委員長)

今年2005年2月25日、午後2時から当協会事務局で開催された『平成16年度総会』は、NHKに対する会員達の怒りと反発の声につつまれました。

事の起こりは、職員が放送作家ではない人物を“放送作家”として登録し番組予算を横領した事件を受けて、NHKが不正支出の再発を防止し、番組作りの透明性を高めるとして『放送作家等審査委員会』(ほうそうさつかつとうしんさいいんかい)を設置した事にあります。

『放送作家等審査委員会』は、昨年2004年9月7日付けでNHKが公表した「芸能番組制作費不正支出問題等に関する調査と適正化の取り組みについて」の報告で、その存在が明らかになった委員会です。

そもそもNHK職員が番組予算を横領した事件に、何故放送作家が審査されなければならないのか、『放送作家等審査委員会』とは如何なる委員会であるのか、その設置理由は何か。

創作活動と関係のないところで、放送作家の選別や切り捨てに使われることはないのか。

「資格審査」の名のもとに、抽象的な基準によって放送作家の選別が進むことは、制作現場の創意や活力を殺ぎ、ひいては言論の自由を脅かすことにならないのか。

理事会は昨年11月18日、海老沢勝二NHK会長(当時)に4項目からなる次のような質問状を送りました。

- ① 放送作家等審査委員会は、何を目的とする、どのような性格をもった委員会なのか。
- ② 放送作家等審査委員会のメンバーはどのような人たちで構成され、メンバーは誰が決めるのかまたその選択基準はどのようなものなのか。
- ③ 放送作家の審査基準は何か、その基準を誰がどのように決めるのか。
- ④ 放送作家等とあるが、「等」とはどのような人たちが含まれるのか。

これに対して1週間後の11月26日、NHK専務理事で放送総局長(当時)の関根昭義氏から回答(*詳細は放送協のホームページで公開)が送られてきました。しかしその回答内容は放送作家の定義及び放送作家の仕事に対する理解と認識があいまいで、審査委員会の目的や理念がはっきりせず、とうてい納得

できるものではありませんでした。

しかも、NHK職員が私利私欲のために“放送作家”の名を利用し、それを悪用することによって我々放送作家が「被害者」とされたにもかかわらず、そのことへの謝罪の言葉も残念ながらありませんでした。

さらに昨年12月19日夜に放送された特集番組「NHKに言いたい」で行われた『放送作家等審査委員会』のフリップ説明は、<放送作家はいかがわしく、信用出来ない人たち>とのイメージを視聴者にミスリードしかねないものでした。

そして今年2005年1月29日の橋本元一新会長による「NHKの再生をめざして」の特別番組で、再び『放送作家等審査委員会』について不適切なフリップ説明が行われもしたが、これも「放送作家が犯罪に荷担したため審査の対象となる」のだという誤解を視聴者に与えかねないもので、会員の中から、「NHKに対する世の批判が高まる中、放送作家を悪者にする事で、それをかわすための方便ではなかったのか」

『放送作家等審査委員会』は問題のすり替えであり、責任の転嫁に過ぎない」

との憤りの声がわきあがりました。NHKが『放送作家等審査委員会』を設置すると公表したことで、40数年にわたって私たち日本放送作家協会が築き上げてきた信頼と実績、そして放送作家の名誉を著しく傷つけられたことは否定できません。

理事会ではNHKに面談を申し入れ、『放送作家等審査委員会』設置の真意を質す事にしました。

NHKとの一回目の話し合いは、今年2005年2月15日午後3時からNHKの会議室において行われました。協会側から市川森一理事長、水原明人・南川泰三両常務理事、大倉徹也、毛利恒之、香取俊介、安達充の4理事の計7名が出席。NHK側からは理事の出田幸彦放送総局長代行を中心に、編成局から後藤雅実統括担当部長・渡辺伸一郎副部長、番組制作局から土屋秀夫・西村与志木・大鹿文明各部長、マルチメディア局から荒巻優之著作権部長が出席、NHK側も同じ7名で話し合いが行われました。

話し合いは2時間半にわたって行われ、当協会の抗議に対して出田放送総局長代行は「うちの職員が放送作家の名を利用し、それを悪用したためにあらぬ誤解を社会に与え、その結果放送作家の皆さんに多大のご迷惑をおかけしてしまった。誠に申し訳ありません」

と、謝罪し次の2点を我々に約束しました。

- ①『放送作家等審査委員会』の名称については変更を検討する。
- ②この件については、何らかの形で公に訂正する方法を考えたい。

この2点について、10日後の2月25日の「総会」までに具体的な進展があれば南川・安達いずれかに連絡するという事でこの日の会合は終了しました。

2月25日の「総会」を迎えましたが、残念ながらこの時点でNHKからの連絡はなく、会員諸氏から激しい怒りの声が巻き起こったのは冒頭お伝えした通りです。

総会に出席した毛利恒之理事から以下の2点が提案され、挙手による採決がはかられ賛成多数で決議されました。

(1) NHK職員の詐欺容疑事件に発した不正事件に関して、NHKはかかる不正の防止策の柱のひとつとして、『放送作家等審査委員会』を設けて適正化を図ると国民に対して公言してきた。それがいかに不適切で不当なことであるかは論をまたず、それによって社団法人として「放送作家」の名を掲げて集う我々は、名誉と社会的信用を多大に傷つけられたことに怒りを覚える。

(2) NHK平成17年度予算・事業計画書は、2月15日閣議決定し、いま国会の審査にかかっている。NHKの説明資料には、不正防止・予算適正化の施策の柱として、この『放送作家等審査委員会』が織り込まれていた。これが是正されることがなければ、傷つけられた放送作家の名誉は回復されず、ときを逸して禍根を残す。我々は、今まさに国会、視聴者にその不適正、不当をアピールしなければならない時に立たされている。NHKに対し速やかに『放送作家等審査委員会』の名称の撤廃と、放送作家の名誉を傷つけたことに対し、公的に遺憾の意を表明することを求める。

以上のような総会出席者の「決議」を受けて、理事会は直ちにこの問題の窓口となっているNHK編成局統括担当部長・後藤雅実氏に対し、次のようなメールを南川泰三常務理事名で出しました。

＜本日、日本放送作家協会の総会があり、NHKの『放送作家等審査委員会』について、これまでの経緯と先日の出田理事とのお話し合いの結果を報告しましたところ、執行部の思いを越える怒りや反発が噴出いたしました。当協会が2月25日に総会を開くことをお伝えし、南川または安達にご連絡戴くことになっていました。その後、ご連絡戴けないということは、進展がないということなのでしょうか。私どもは国会でNHKの改革案・予算案が承認される前に、この問題が解決されることを望んでおります。つきましては早急に出田理事をはじめとする関係者の方々と、再度お話し合いの機会を設けていただけませんか＞（要約）

NHK側も当協会の姿勢を認識し、真摯に話し合う場を再度設けるため、折衝の窓口になった南川常務理事と後藤編成局統括担当部長との間で日程の調整を行いました。その結果、総会から10日後の3月7日月曜日、NHKとの2度目の会合が午後3時30分からNHKで行われることになりました。

協会側から南川泰三・水原明人両常務、安達充理事の3名が出席。NHK側は編成局統括担当部長・後藤雅実氏、番組制作局芸能番組センター部長・西村与志木氏、マルチメディア局著作権部長・荒巻優之氏の計3名が出席し、お互いに率直に意見を交換しました。

この席で、協会側は総会に於いて満場一致で決定した会員の怒りの総意を伝えると共に、我々の総意が速やかに実行されない場合、協会としてはマスコミを通じてこの問題を世間に公表することもあり得る旨を併せて伝えました。

それに対し後藤氏から再び謝罪表明があったものの、後藤氏の権限では我々の納得出来る答えを表明するに至らず、この問題の当面の責任者である出田幸彦放送総局長代行と早急に相談し出来るだけ早く返答すると約束するにとどまりました。

2日後の3月9日、NHKの後藤氏から以下の内容のメールが届きました。

＜国会で審議される「NHK17年度収支予算、事業計画」が承認された場合、記録として残る正式な文書は「収支予算、事業計画」のみとなり、『放送作家等審査委員会』に関する記述は含まれていない＞

＜現行の『放送作家等審査委員会』を見直し、新たに『委嘱業務等審査委員会』が名称案のひとつとして候補にあがっている。この委員会の中に、脚本・構成・作詞・作曲など文芸委嘱に加えて、リサーチ業務など多様な業務について審査する小委員会（分科会）のようなものをつくることを考えている。『委嘱業務等審査委員会』（仮称）ができれば、放送作家が審査の対象となるような誤解を招くことにはならないと考える＞

＜現行の『放送作家等審査委員会』を見直し、新たに『委嘱業務等審査委員会』を設置することを公表するのは、3月23日水曜日の出田放送総局長代行の定例記者会見の場を候補として検討している＞

放送作家協会の総会決議によって、NHKが改革の目玉としてアピールしてきた『放送作家等審査委員会』の名称は撤廃へと動き出しました。我々の強い怒りをNHK側も真摯に受け止めたものと解釈し、事態の推移を見守ることとしました。3月19日、出田放送総局長代行の定例記者会見を目前にして後藤氏から次のようなメールが入りました。

＜『委嘱業務等審査委員会』（仮称）を新設するべく準備を進めています。先日のご連絡で、この新しい委員会の設置と『放送作家等審査委員会』の名称の廃止について、公表する機会の候補の一つとして23日（水）の放送総局長会見を検討しているとお伝えしました。しかしながら、この件とは別の事情で、来週の会見では扱わないことになりました。引き続き、公表の方法について検討を続けます。また「文書化」の件についても検討中です。よろしくお願ひします＞

3月31日「2005年度NHK予算案」は国会で承認されました。

その後、南川常務理事と後藤氏との間で「実務者レベル」のメール交換が行われた結果、4月18日、出田放送総局長代行から市川理事長宛に親書が届きました。4月22日の放送作家協会の理事会で、市川理事長から親書の内容説明がありました。

「放送作家等審査委員会」の設置やその名称が、結果として放送作家の名誉や信用を損なう印象を与えてしまったことを遺憾とし、お詫びするとの内容でした。

更にNHKは不正防止のため、新たに「委嘱業務等審査委員会」を設置し、台本執筆業務の他、作詞・

作曲、考証・監修など外部の専門家を起用して行う委嘱業務全般に関する事前審査制度を強化すると共に「放送作家等審査委員会」を廃止し、その旨をNHKのホームページに公表しました。

以上の経緯を理事会で検討した結果、NHKから我々放送作家の名誉が傷つけられたことに対し公的な表明はなかったものの、「放送作家等審査委員会」が廃止されたこと、および責任者である出田放送総局長代行から直接「お詫びする」との言質を得たことで、この問題に関してNHK側が誠意を見せたことと解し、了とすることにしました。

理事会では、交渉を通じて出田放送総局長代行はじめ実務担当者が、NHKという組織内にあって精一杯の努力を傾けたとして、評価するとの声が出たことも付記しておきます。

当協会では、この委員会が、「外部専門家」に対する、一種の思想調査や選別、無言の圧力等に利用されないよう、引き続き委員会の活動を注視していきたいと思っています。

あとになって、いったいわないの弊害をさけるためにも、詳細に、かつ具体的に事態の推移の経過を関係者に理解していただくため、ポイントとなるメールの内容の核心部分を公表させていただきました。

もとより、当協会とNHKとは放送文化の向上のため、長年にわたり協力しあってきた関係であり、今後とも懸賞ドラマコンクールや、脚本アーカイブスの設立等で協力しあっていくことに変わりがありません。我々としては、一部職員の「不祥事」が制作現場の職員の士気に影響し、萎縮したり、実験精神、チャレンジ精神を失うようなことのないよう、せつに希望するものです。

民間放送とは異なった独自のスタンスで、質の高い番組をつくらんと共に、ジャーナリズムの原点に則った報道等が、「公共放送」としてのNHKに課せられた役割だと思っております。

お忙しい中、問題の解決のため真摯に努力をされたNHK、および当協会の関係者の皆様、ご苦労さまでした。

2005年4月25日

放作協から日本放送協会(NHK)へ宛てた質問書と日本放送協会(NHK)からの回答は放作協のホームページで公開しています。そちらもご覧下さい。

さて、私たち放送作家協会が2003年から、地道に推し進めてきた「日本脚本アーカイブズ」設立にむけての動きを、南川泰三常務理事から報告いたします。アーカイブズ設立は、市川森一理事長が「テレビ放送50年を迎えた今、貴重な文化遺産と言える放送台本が散逸している。これを保管し管理する場所を早急に作る必要がある」と発想したことがきっかけとなって、推進しているものです。既にその基本的なプランニングは出来つつあり、後はより具体化に向けて進む段階に入っています

日本脚本アーカイブズ会館実現へ

日本放送作家協会 常務理事 南川泰三

テレビ放送が始まってから50年を迎えました。

その間、テレビは数え切れない番組を送り出し、数々の名作、人気番組、話題作を産み出して来ました。日本人一人一人の胸の中に必ずいくつかの忘れられない番組や心に残る番組があることでしょう。

ドラマ、ドキュメンタリー、バラエティ、ワイドショー、アニメ……、様々なジャンルで大衆と共に生きてきたテレビ番組。まさにテレビ番組は世相を映し出す鏡でもあります。

しかし、残念なことにその時々脚本や台本はほとんどが散逸し、残っていても極一部が局や図書館に保存されているのが現状です。

多くの名作を産み出した脚本家のシナリオも、一部で保存されている作品以外は消失する危機に瀕しています。脚本や台本は稀少な庶民史でもあり、放送文化にとっても重要な財産です。テレビ放送50年を迎えた今、この膨大な数にのぼる脚本や台本を管理、保存し、資料として体系化することが急がれます。

又、近年、テレビ時代を創って来た脚本家・放送作家たちは高齢化し、他界された方も少なくありません。今、貴重な脚本や台本の発掘に取りかからなければ、この国の放送文化に禍根を残すことになります。

私たちは放送脚本、放送台本を保存、分類、管理し、同時にそこから発信して国際シンポジウムや様々な企画展、講演会等が可能な「日本脚本アーカイブズ会館」（仮称）の早期実現を望んでいます。

そのため、この二年間、地道な準備を続け、NHKの放送台本供出の協力や、実現可能になった時の足立区における協力体制の確保など、環境づくりをしてまいりました。そして、いよいよ平成17年度より三年計画で、現在までの脚本及び放送台本の所在と管理実態の把握、「日本脚本アーカイブズ会館」実現を前提として、どのように台本を収集し、保管・管理をするか。それにはどの程度の人員と保管場所の規模、予算等が必要か等の調査・研究に着手したいと考えます。

そのために平成17年度の文化庁の補助金申請も行いました。いわば家を建てるための「草むしり」から「整地、土台づくり」の段階に入ったわけです。

「アジアシナリオコンクール」「NHK大河ドラマ脚本展」「人気アニメ作家講演と台本展」など、「日本脚本アーカイブズ会館」実現後の夢は広がる一方です。

この日本脚本アーカイブズプロジェクトに御参加を希望される方は是非、日本放送作家協会事務局（03-3401-5996）までお申し出ください。

5月25日(水) 日本放送作家協会の総会が開かれました!

総会の詳細については、放作協のホームページで報告しますが、ここに、要点をご報告します。

平成17年5月25日(水)、午後3時30分から、六本木の事務局会議室で、第44回通常総会が開かれました。会員数1014名のうち、出席者は46名、委任状提出者は583名、会員の62パーセントを超えたので総会として成立しました。

市川森一理事長の挨拶のあと、平成16年度の事業報告に移り、放送関係の各種事業の企画と実施、学会、講座、コンクール等への協力のほか、メディアリテラシーを考えるフォーラム、テレビとラジオのドラマ脚本コンクールや、機関誌、会報の発行などが報告されました。

このところ協会の活動は活発になってきており、日本脚本アーカイブスの設立準備や、福井での国民文化祭への協力など、今後の展望についても、担当委員から報告されました。

また関西支部、中部支部、九州支部、北海道支部からの活動報告のほか、各委員会の活動報告が行われました。事業報告書に基づき監査の結果、予算の執行等についても適正であることが認められました。

最後に理事長から、NHKの「放送作家等審査委員会」について当協会とNHK側の協議の結果、この委員会が撤廃に至った経緯、および3月に実施された当協会と韓国放送作家協会との交流ツアーなどについての報告がありました。総会終了後、同じ場所で懇親会が開かれ有意義な時間を過ごしました。

放作協のホームページは、<http://www.hosakkyo.jp>

* トップ頁には協会員専用の掲示板、またメンバーズサロンにも交流の掲示板を設けました。メンバーズサロンの掲示板はどなたでもすぐに書き込みができますので是非ご利用下さい。

* ホームページは放作協の事務局でもご覧になれます。お気軽にお立ち寄りください。

企画・編集／広報委員会

香取俊介（長）、さらだたまこ（副）、東海林桂（副）、井上美保子、奥山侑伸、皿倉のぼる、藤森いずみ